是れも路上の珍風景

K G 生

▲ウワツと云ふサイレンの音に、心臓を破られた。私の神經は電氣でも傳はつた樣に激しく感じたのである。自働車ポンプは疾風の如く私の眼の前を走り去つた。ふとポンプの去つた路上に私の神經が集中した。一匹のねずみが、路上にあわれな、いたましい斷末の姿を留めて居るのである、人間だつて小動物だつて無慘な姿を見れば氣の毒に思ふ眼をそむけるのだらうが？……だが之はねずみが路上に出て來たのではなくて、人間がねずみを路上に投げ出したのだつた。勿無鼠は車の往來の激しい路上に、逆上して自殺しに來る程間抜けては居ない筈だ。

之は唯之だけの小さな出來事に、すぎないかも知らないが、私は次の日、私はいつもの樣に勤めに出掛けたが、日頃通る道と異つた道を通つた。廣い鋪道は一週間前と變りはない。私の神經は一週間前と變りはない、此の鋪道に何か感ずる事があつたらしい。果して路上の一點にそこには腸を出した、ねずみが二匹一間ばかり間を置いてころがつて居た。最初は見過して通り過ぎたが、又少し歩むと、今度は頭を割られたねずみが一匹投げ出されて居る。ねずみのころがつて居るのは二ケ所ばかりではない。二三間ゆくと又そこにもあつた。來る日も來る日も路上にねずみの屍體がころがつて居る。釋尊が印度のカピラ宮殿にあつた時の話を想ひ出した。東すれば死人、西すれば人々の爭鬪、南すれば餓鬼道にあえぐ人間の姿、北すれば老ひさらばえた哀れな老人、順序がちがつたかも知れないが兎に角かう言

つた様なみにくいものを見せつけられた、彼は世の中の諸行無情を感じてカピラの宮殿をのがれて悟りの道に入つたとか、こんな話を聞いた事があつた。釋迦ならずとも毎日毎日見せつけられる、こうした路上の悲慘事に私は良い加減に腐り切つたものを感じた。唯にねずみのこうした慘酷な姿ばかりでない。毎日の新聞記事に記載されて居る交通事故を想ふとき哀しい感情に襲はれるのである。私は交通事故を言はうとしてねずみや釋迦を持出したのではなかつた。路上のねずみの悲慘な姿を見た時ねずみに同情の心を持つてやると同事に人間の心に反省させ度いのだ。眞夏の太陽が地上にてりついて居る時などは。此の屍體から發するむつとする臭氣に、吐氣をもよふす事がしばしばあつた。勿論私以外の通行者は鼻をつまんで通らなければならない不便さで在る。私は金蠅が群がつて居る屍體に少からざる恥らひを感じた。家の中で獲つたねずみを路上に捨てあるひは既に死んだねずみを、殊更に路上に叩きつけて、面白味を感じて居る、此の道路の沿線の住民の心理狀態に疑をかけると同時に哀れな人間の感情を知つた。

四年後いや最早三年後の世界の國際オリムピツク競技開催地の東京にこうした不淨極まる街路の光景が數多く見受けられる、而も帝都人口の大半を有する下谷淺草方面の道路にねずみの屍體の多い事は唯おどろくの外ない。道路を美しくする前に人間の感情美を正しく見出すことに爲政者は心しなければならないだらう。

▲縣廳のマークをつけた自働車が田舍道を走つて行つた時、車の中には私ともう一人の相手が乘つて居る。丁度雨でひどく荒れて居た。二丁位の間で道路人夫達が四五人づゝで穴のあいた道路に砂利を運んでは埋めて居た。自働車がそこ迄さしかゝると彼等は一樣に鍬を上げて左右に道をひらいて呉れた。

それが市街地を離れた山間地の道路の改修をやつて居る事だつたので、私は此の人々に「御苦勞樣です」と聲を掛けた。

彼等は之の言葉がどんなにうれしく響いた事だつたつた

か、知らない。私が此の言葉を掛けたゞけでも親切さうな態度を示して呉れた。此んな道をわざ〳〵御出になつてさぞおつかれの事でせうに、と言つて呉れた。私は非常に良い事をした様に感じたのだつた。こんな様な話を交はして居る間、しばらくそこに車を止めて彼等の監督者をねぎらひ、話をしたのだつた。別に道路視察に來たのでもない私ではあつたが、何かしら道路に對する興味を引かれたのだつた。そして車を走らせる際に彼等の一人が「ここまでの道はまだ雨に叩かれた上に貨物自働車が通り過ぎたばかりなので苦勞でしたでせう」かう云つて親しい言葉を掛て呉れたのだつたが其の時の其の時の心うれしさは今でもまだ私の腦裏から消えずに居る。土木管區の事務所から五里もある場所まで彼等は毎日鍬や鶴嘴をかついで出掛けて來るのだと云ふ。日に依つては五里も六里も先まで行つて働く彼等の勞働の神聖さに私は心打れたのだつた。役人威張りをして若し此の道を通り過ぎたとしたら彼等はどんなに反感を持つ事だらう。親切に報ひるに親切をもつてする氣持こそ爲政者にとつては必要だらう。理想の政治はこゝから生まれるのではないだらうか。(岩手縣漫遊の時)

▲甲「おい君も相當のんきだなあ」

乙「なんでだい？」彼は不思議さうにかう反問した。

甲「なんだッて君の下駄を見ろや」

乙「俺の下駄になにか變つた事でもあるのか？」

甲「君は其の下駄を何日位履いたんだ。おそらくさうだな去年の正月ぢやなかつたか……」

乙「さうだな去年の正月頃だつたかも知れない」

甲「頃だつたかも知れないとは……おそれいつたよ」

乙「どうしてさ」

甲「君は其の下駄を何年位はくつもりだね」

乙「俺はなあに此の下駄がうすい紙になるまで履くつもりだよ……あはッはッ」

甲「ところで君の下駄の履き方は仲々經濟的だなあ」

乙「どうしてだ」甲「君の下駄は先がへらないで後が先にるへからさ」乙「うむさう云はれゝば俺の下駄や足駄がみ

んな後からへつて困るんだよ、ウツフツフ」彼はいたつて豪快に笑つた。甲「下駄のへらし方によつて人間の性質が分るさうだが君の性格も良く下駄が表はして呉れるよ、こう云ふ人間が女性に好かれるさうだ、はゝ、して見ると君も女性の一人や二人にとりまかれて居る方だな、あツはツはツ」乙「君かさう一人で定めてしまつちや困るね、一體全體どう云ふ意味で君、僕の性格が女性に好かれるんだね」此の男至つて平氣らしい。甲「あツ此の人中々のんびりしてるよ。つまりその、のんびりした所が男らしくて良いと云ふんで彼女等は好く理由さ……どうだ一つおごらないかわツはツはツ……」乙「そうするとなにか……その下駄を後からへらす様な男は暢氣者と云ふ事になるのかなあ……うんさう云ふわけか……」

今氣がついた様な事を云つて居る、至つて暢氣なしるしです。乙「だけど俺は此の下駄をへらすまでには何十里何百里歩いて居るかわからないぜ、君の様なモダーンボーイは凡そ下駄なんて履いて歩く事は少ないんだらう」甲「まあそう云へば俺は殆ど下駄なんか履いて歩いた事はないからな」乙「何しろ、おれは純日本式を好むんで近頃は東京の道路は何所へ行つても固いコンクリートの所ばかりだからたまらんよ……」「純日本式も良いが固い所に固いもの履いて歩いたんじや結局駄目と云ふものじやないか、だからさ普通の公式でいけば十一＝〇と云ふ様なもんだが君の奴は固いものを十とすれば十十＝〇と云ふ珍無類の公式になるぞ、あツはツはツ、吾々の十－＝〇と云ふのは卽ちだね、固い路面を歩く時は反動のあるやわらかみのくつがあるんだ、くツ卽ち苦痛（ゼロ）〇と云ふ事になるね、あはツゝゝかうなると純日本式も苦痛〇と云ふ公式がなり立たんから二倍の苦痛となるぜ。

甲は更に言葉を續ける「下駄を横ツチョにへらす奴が居るが之等は心の横ツチョの奴だと云ふ事だし、又兩方同じにへらす奴はくそまじめな男であるさうだ、君はのん氣ぼうで女性に好かれる方だ、どうだ悪くはないだらう、あツはツはツ……」時ならぬ下馬評いや下駄評である。